

〈教育調査・研究〉

日本バスケットボール界における男子選手育成の
課題に関する一考察
— スペインクラブチームの育成理念及びシステムの
現地調査をもとにして —

町田 洋介

〈要旨〉

本研究は、スペイン・マドリードにおけるクラブチームの育成理念及び育成システムを調査するとともに、日本のバスケットボール界における男子選手に対する育成面での課題について考察することを目的に実施したものである。現地にて行った、ACB（スペイン1部リーグ）に所属する3つのクラブチーム（フエンラブラダ、エストゥディアンテス、レアル・マドリード）の育成責任者に対するインタビュー調査の結果から導かれた課題は以下の通りである。

1. 日本では、共通化された具体的な育成理念が見当たらないのが現状であり、まずは、育成における共通理念を確立することが必要であるということ。
2. 年齢毎に細かくカテゴライズされ、1チームの人数が12人程度に抑えられているスペインの育成型クラブのシステムを参考にすべきであること。
3. ミニのカテゴリーにおける3ポイントルールの有無は、スペインと日本の育成現場での大きな違いの一つであるということ。

〈キーワード〉

スペイン、バスケットボール、育成理念、育成システム

【本研究の背景及び目的】

日本のバスケットボール競技において、特に男子日本代表チームに関しては、近年、アジア地区の中で上位に入ることすら難しい状況が続いている。そのため、2020年には東京オリンピックという一大イベントが控えているものの、このままの競技レベルであれば、

国際バスケットボール連盟（以下、FIBA）からの許可が下りず、開催国枠での出場権すら獲得できない可能性が高いとされている。そうした現状を打開するため、日本のバスケットボール競技全体の課題の一つとして、育成方針や育成システムの構築が挙げられている。（日本バスケットボール協会、2016、pp1-52）

特に諸外国と日本の間における大きな差異として考えられているのが、「コミュニティスポーツとしての発展とプロスポーツとしての発展がうまく両立していること」である。諸外国では、「各コミュニティを代表するプロチームを地域の住民皆で応援する」というのが典型的な姿であり、「コミュニティの基盤は、『クラブ』であったり『スクール』であったりとさまざまであるが、15歳くらいから『トライアウト（選抜試験）』がおこなわれ、能力の高い子どもたちが、プロをめざして切磋琢磨する仕組みができています。」（日本バスケットボール協会、2014、p.190）というのがその内実である。

日本では、こうした諸外国の構造をモデルとし、男子バスケットボール界において、統一プロリーグである JAPAN PROFESSIONAL BASKETBALL LEAGUE（以下、Bリーグ）が2016年に開幕した。このBリーグでは、リーグに所属する各チームに対し、1つ以上のユースチームを保有することを義務付けており、上述した「プロを目指して切磋琢磨する仕組み」の構築が少しずつ整い始めている。

こうした中、上述のような仕組みが特に上手く構築され、機能しているのがヨーロッパ諸国であり、その中でも最も成功している国の一つがスペインである。それというのも、「スペインのバスケットのレベルは世界でもトップクラスであり、FIBA ランキングで見ると（2015年1月末現在）、男子はアメリカに次ぐ2位、女子は3位となっている。特に男子のスペイン代表は、2006年に日本で開催されたFIBA 世界選手権で優勝し、2009、2011年のヨーロッパ選手権で優勝、2008年北京オリンピック、2012年ロンドンオリンピックでは銀メダルを獲得するなど、その躍進は著しい。」（町田ほか、2014、p.64）とあるように、2006年以降の戦績は世界トップクラスに位置しているためである。なお、直近の戦績を見ても、2016年リオデジャネイロオリンピックでは、男子は銅メダル、女子は銀メダルを獲得しており、2016年8月時点のFIBA ランキングにおいては、男女とも2位に位置している。2006年以降の10年間で、上記のような成績を安定して残しているということに対し、偶発的に才能ある選手が生まれたことによって得られたものではなく、スペイン国内の各地における育成事業の賜物だと考えるのは不自然なことではないだろう。

ここでスペインのバスケットボール事情を概観してみると、スペインでは、国内トップリーグとして18チームで構成されるACBと呼ばれるリーグがある。先攻調査によれば、このリーグに所属する各クラブは、大きく2種類に分けることができ、「一つは、勝

負に徹したクラブ。いわゆる“勝利至上主義”型のクラブである。(中略)国際競争力を持ち、常に勝ち続けることによってファンを獲得。そして、チームに対するより深い愛着を育みソシオ会員を獲得する。その結果として、さらにスポンサーを獲得するという運営スタイルのクラブである。」もう一つは「資金力では劣ってしまうが、才能豊かな優れた逸材を見出し、そのプレイヤーを育成することで、ビッグクラブにそのプレイヤーを引き抜いてもらう。その成果としてクラブに大金が支払われ、その資金でクラブを運営するというタイプだ。このように、スペインのクラブはおおよそ、どちらかに大別できる。」(倉石, 2014, p.81)とされている。本稿では、以下に紹介する今回インタビュー調査をした各クラブの属性を分かりやすくするため、前者を“勝利至上主義型クラブ”, 後者を“育成型クラブ”というように呼称したい。

筆者は、2014年3月、日本バスケットボール協会による指導者育成事業の一環で、スペインのバルセロナでの3週間の研修に参加し、カタルーニャ地区のクラブチームの取り組みの視察及びインタビュー調査や、カタルーニャ地区バスケットボール協会への訪問及びインタビュー調査などを通し、スペインにおける育成方針や育成システムを学んだ。また、2016年2月にも同じくバルセロナを訪問し、2014年では見ることができなかったカタルーニャ地区バスケットボール協会による育成事業を視察することができた。

こうした経緯を踏まえて3回目となる今回(2017年3月)のスペイン訪問は、スペインの中心地区であるマドリードでの各クラブの取り組み、特に育成理念及び育成システムを調査するとともに、日本のバスケットボール界における男子選手に対する育成面での課題について考察することを目的に実施したものである。

【調査チーム及び調査方法】

マドリード近郊にあり、ACB(スペイン1部リーグ)に所属する3つのクラブチーム(フエンラブラダ、エストゥディアンテス、レアル・マドリード)の育成責任者に対し、各クラブの育成理念と育成システムを中心にインタビュー調査を行った。

各クラブの概要は以下の通りである。

・モンタキット・フエンラブラダ(以下、フエンラブラダ)

1983年に発足。クラブの歴史は比較的浅く、現在までに国内リーグや国王杯のタイトルは獲得していない。今回インタビューを受けて頂いた育成責任者のナチョ・ロディージャ氏は、育成部門の改革のため2016年の夏に現ポストに着任したばかりであり、クラブは現在、転換期の最中である。資金力には恵まれないため、より優れた育成型クラブを目指しているクラブだと言える。

・モヴィスター・エストゥディアンテス（以下、エストゥディアンテス）

1948年に発足。国内リーグでの優勝は無いものの、国王杯では3度優勝している。クラブと学校が連携を取っている非常に希有な形態を取っており、トップチームも含めて1000名以上の選手が在籍している。

また、メインの練習会場の他に、もう一つの屋内練習場（バスケットボールコート2面）があり、屋外コートも9面ほど有している。屋外コートは少し小さめということもあり、小中学生のカテゴリーが主に使用している。

資金力に恵まれてはいないものの、このクラブからは、NBA（全米プロバスケットボールリーグ）や国内ビッグクラブに選手を輩出していると同時に、スペイン代表選手も多く輩出しており、国内有数の育成型クラブと言える。また、2006年に日本で開催された世界選手権でスペイン代表が優勝した際のヘッドコーチであるペピュ・エルナンデスは、1994年から2006年までこのクラブのトップチームを指揮していたことで有名である。

・レアル・マドリード・パロンセスト（以下、レアル・マドリード）

1902年に発足。サッカーで世界的に有名なクラブだが、バスケットボールにおいても国内リーグで33度の優勝（現ACBでは11回）、国王杯で27度の優勝を誇る国内トップクラスのビッグクラブである。その豊富な資金力を武器に実力ある選手を獲得、トップチームにはNBA経験者も多数在籍している。2015年にはバスケットボールコート4面を有する大規模な屋内練習場を完成させ、クラブの魅力を更に高めている。上記の勝利至上主義型クラブの典型である。

【インタビュー内容及び結果】

1) ナチョ・ロディージャ（フエンラブラダ育成責任者）インタビュー

①育成理念

以前、フエンラブラダでは明確な指導方針がなく、それぞれのコーチのやり方で指導を行っていた。しかしながら、その結果クラブ内でのズレが生じ、選手の成長にもマイナスの影響を及ぼし、クラブとしての価値を高めることができていなかった。

ナチョ・ロディージャ氏が育成責任者としてフエンラブラダに呼ばれたのは、上記のような状況であったクラブとしての指導方針の整理と各コーチへの共通理解を促すことを期待されていたことだった。

現在、フエンラブラダでは、育成年代においては技術習得を第一としており、戦術は技術習得の後と考えている。戦術もちろん大事ではあるが、その戦術を最大限生かすためには個人で状況を打開する能力が必要だと考えている。そのために、個人の技術に焦点を

当て重点的に練習をしている。これは勝利を度外視するというのではなく、技術練習の中にバスケットボールの基本的な動き方も取り入れながら、チームとしても勝利に近づこうよう練習しているという意味合いであり、勝利は目指しながらも、習得の優先順位として技術習得を第一とするという考え方である。

この際の技術習得方法はコーチによって変わり、多様なものとなるが、目的は共通している。ある技術だけを切り取り、ディフェンスや状況判断がない練習を行うだけではなく、ディフェンスの対応を含んだ1対1や3対3などの様々な方法や状況を作り、達成したい目的や課題に向けて解決できるよう、試合や普段の練習の中で生まれた課題に対して、チームや個人で課題を解決するために練習を行い、練習中で課題解決を促す練習を繰り返して行っている。このように、個人技術を向上させ、試合の中でどうやって活かすかを考える訓練をしている。

なお、U16までに一通りの技術を習得させるということを念頭に置いている。フエンラブラダでは、17歳まではポジションは固定せず、ポジションにとらわれることなく様々なことにチャレンジさせている。様々なポジションを経験することでたくさんの技術が身に付きやすく、ポジションを固定した後も、プレーの幅がある選手へと育っていきやすいと考えている。18歳以降では身体的な成長はあまり大きくないため、その選手がより活躍出来るポジションを精査している。トップチームになれば、当然全ての技術を高いレベルでプレーできなければならないが、1～3個くらい得意なものを持っていて欲しいと考えている。

セカンドチーム（U18）はトップチームを目指すカテゴリーであるため、5on5も行う。セカンドチームでは、ソリューション（解決方法）を教える。これはただの読みではなく、どの選択肢が最良なのかを選べるようにするということを意味する。ポジションはこのカテゴリーから固定化する。

昨年のプレシーズンでは、セカンドチームの4名がトップチームの練習に加わっており、そのうち1名はシーズン中もトップチームの練習に参加し（いわゆる飛び級）、試合はセカンドチームでプレーしている。

練習時間の配分としては、シーズン開始直後は1～1.5時間フィジカルトレーニングをし、1.5時間バスケットボールのチーム練習を行う。シーズンが経過し、体作りができてきたら45分フィジカルトレーニング・45分個人練習・1.5時間バスケットボールのチーム練習といった形となり、5on5は基本的に行っていない。

②育成システム

このクラブでは6歳から育成組織を持っており、育成のコースとスクールのコースに分かれている。6歳～9歳までは全ての選手がスクールコースに属することになり、カンテラと呼ばれる競技的な育成コースには、選ばれた選手のみ、10歳から参加可能となる。ただし、10歳以降でスクールコースに所属している選手も、実力が認められれば育成コースに移籍することも可能となっている。

なお、外国籍や遠方から参加している将来性のある選手に対しては、寮や食事などの環境面も整備するようにしている。試合は2週間に1度のペースで行われている。



写真1. フェンラブラダの練習場内観

2) パブロ・ボラス（エストゥディアンテス育成責任者）インタビュー

エストゥディアンテスの練習場は地域の公立の学校（ラミロ・デ・マエトゥ）と提携しており、学校の敷地内にクラブ保有の練習場で、通称、マガリーニョスと呼ばれる建物（写真2）がある。また、クラブと学校が提携しているので、クラブの練習場を学校の体育の授業で使用したり、クラブが学校保有の体育館を利用させてもらったりと、それぞれの運営が密接に関っているのが特徴的である。



写真 2. マガリーニョス外観



写真 3. マガリーニョス内観

①育成理念

エストゥディアンテスではコーチングの二つの大きなガイドラインがある。

一つは一人のコーチが同じカテゴリーを教えることができるのは2年までということであり、これは同じ人から同じように同じことを教わり続けるということは、選手のコーチに対する多様性への対応力を阻害すると考えられているためである。これは、コーチ側による選手に対する好き嫌いによって、不平等が生まれることを防ぐという目的も内包して

いる。

二つ目は各カテゴリーで何を教えるかということ。エストゥディアンテスではU12までは個人技術の習得が目的とされ、U13から戦術的な要素が加わり始める（表3）。とはいえ、それはフレックスオフェンスなどのようなシステマチックなチーム戦術ではなく、味方のドライブに対する連動の仕方や、パス&カットといったグループ戦術のことを指す。U15からはスクリーンプレーが加わり、プレーに関わる人数が増えることで難易度も高くなる。U17からはより難易度の高い、ピック&ロールやゾーンディフェンスが加わる。ただし、このような各カテゴリーでの取り組み内容は、その時のテクニカルディレクターの方針によってその時期などが変わる可能性があるようである。

なお、各選手におけるポジションの完全な固定化はU17以降となっており、U13の段階ではポイントガードのみ、U15の段階ではポイントガードとインサイドプレーヤーのみがある程度固定化されている。ただし、基本的にはU14までは全てのポジションをプレーさせるということになっている。

また、スペインではミニ（小学生）のカテゴリーにも3ポイントルールが設置されており、マドリッド州の場合は、スペインバスケットボール協会の大会でも用いられている、ゴール付近に模られた横長の長方形の形が採用されているようである（写真3を参照）。その長方形のエリア外からのシュートは、成功すると3ポイントとして計算されることになる。ボラス氏曰く、シュート本数や成功率を厳密に測ったことはないが、子ども達は遠くからでもシュートを積極的に放っているとのことであった。



写真 4. 屋外にあるミニのコートの様子

②チーム及び育成システム

チームの構造は表1のようになっており、大きく分けて四つの部門に分かれている。

一つ目はスペイン1部リーグに所属するトップチームを運営する、「スポーツリミテッドカンパニー」と呼ばれる部門である。言うまでもなく、この部門がクラブの顔となっている。

二つ目は「スポーツ部門」と呼ばれ、部門内でハイパフォーマンス部門とソーシャル部門に分かれている。ハイパフォーマンス部門は強化及び育成、つまり、1人でも多くの選手をトップチームへ送り出すことを目的としており、個人技術を高めることを主軸に練習が行われている。練習は週3～5回で、90分のトレーニングと90分の練習の合計180分で構成されている。なお、マドリードの外はもちろんの事、スペイン国外からも選手をスカウトし育成している。その際、身長伸びを予測するために手首の骨端線は確認している。一方、ソーシャル部門はいわゆるバスケットボール教室のことを指し、強化や育成というよりも、運動機会の提供や普及といった面を目的としている。そのため、練習は週2回で、1回あたり75分となっている。なお、ソーシャル部門の中でも、いわゆる月謝の金額は異なっており、エストゥディアンテスの提携学校であるラミロ・デ・マエトゥ **Remirode Maeztu**に通う子ども達は年間300ユーロ（6～12歳）か450ユーロ（13～18歳）であるのに対し、この学校外から参加する子どもや学区外で行われるバスケットボール教室では、それぞれ年間900ユーロとなっている。ハイパフォーマンス部門に所属する選手は男女合わせて180名ほどであるのに対し、ソーシャル部門は800名ほど所属していることから、ソーシャル部門がクラブにとっての大きな収入源となっている。また、13歳以上では、年齢毎にインファンティル **Infantil**（U13・U14）、カデテ **Cadete**（U15・U16）、ジュニオール **Junior**（U17・U18）の3つのカテゴリーに分けられており、各カテゴリーで更にA～Hまでの8チームに分かれている。なお、それぞれ1チーム12名で構成されている。各カテゴリーにおいてAとBがハイパフォーマンス部門に属し、C以下はソーシャル部門に属している（表2）。また、スタッフの構造は図1のようになっており、総勢100名のスタッフで構成されている。

三つ目には「社会貢献部門」があり、ダウン症の子ども達への支援や、車イスなどの障がい者支援、低所得者への支援などを行っている。

四つ目にクラブ全体を運営するためのマーケティングや営業といった「リミテッドカンパニー」という部門がある。

表 1. エストゥディアンテスの組織構造


スポーツリミテッドカンパニー	スポーツ部門		地域貢献	リミテッドカンパニー
トップチーム運営	<ハイパフォーマンス> 【男子】 U12 U13 U14 U15 U16 U17 U18 Liga EBA (4部リーグ) 750ユーロ／年 【女子】 U12 U13 U14 U15 U16 U17 U18 Liga Female 2部リーグ	<ソーシャル> 【学校に通う子ども】 U6-12 300ユーロ／年 U13-18 450ユーロ／年 【学校外の子ども】 U4-18 900ユーロ／年 【エリア外でのスクール】 U4-16 900ユーロ／年 	ダウン症の子ども達への支援 車イスの方々への支援 低所得者への支援	マーケティング部門 営業部門

表 2. エストゥディアンテスのカテゴリー構造

カテゴリー	Infantil		Cadete		Junior	
年代	U13	U14	U15	U16	U17	U18
ハイ・パフォーマンス部門	Bチーム	Aチーム	Bチーム	Aチーム	Bチーム	Aチーム
ソーシャル部門	Cチーム		Cチーム		Cチーム	
	Dチーム		Dチーム		Dチーム	
	Eチーム		Eチーム		Eチーム	
	Fチーム		Fチーム		Fチーム	
	Gチーム		Gチーム		Gチーム	
	Hチーム		Hチーム		Hチーム	

表 3. エストゥディアンテスにおける各年代での取り組み内容の概要

U9-10	Dribble
U11-12	Passing
U13-14	Concepts
U15-16	Screen
U17-18	Pick&Roll, Zone Defense

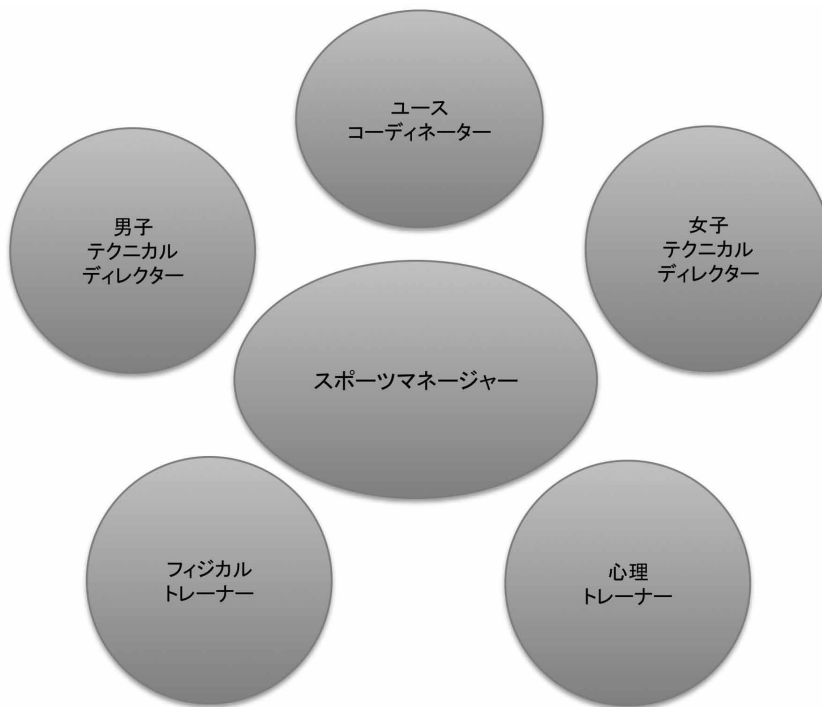


図 1. エストゥディアンテスのスタッフ構造

3) アルベルト・アングロ（レアル・マドリード育成統括）インタビュー

①育成理念

レアル・マドリードにおける育成組織の目的は、良い選手をどれだけ多くトップチームへ送れるかということである。よって、未熟な選手を育てることよりも、良い選手を発掘（スカウト）してくることが最も重要だと考えている。その点では、育成に力を注ぐ他のチームとは異なる取り組みをしていると言える。また、海外からの選手には、語学学習のプログラムも組んでいる。

②育成システム

上記のような育成理念により、レアル・マドリードでは ACB に所属するトップチーム以外ではインファンティル Infantil (U13・U14)、カデテ Cadete (U15・U16)、ジュニオール Junior (U18)、EBA (4 部リーグ所属) の四つしかカテゴリーを持っていない。なお、各年代 8～10 名で構成されているが、年によっては 4～5 人の選手を契約解除したこともあり、競争と入れ替わりが激しい環境になっている。

ゲームの際には、コーチの負担軽減と選手の出場時間確保のため、選手を 10 名に絞っ

て臨むようにしており、各チーム5名ずつのスタッフ（ヘッドコーチ1名、アシスタントコーチ2名、トレーナー1名、マネージャー1名）が配属されている。



写真 5. レアル・マドリードの練習場内観

【考察】

上記のインタビュー結果を以下の3つの項目に整理するとともに、日本のバスケットボール競技における男子選手育成に関する課題を考察することとする。

①共通化された育成理念

スペインにおいて、各クラブの育成理念は、そのクラブが勝利至上主義型クラブに属するのか、育成型クラブに属するのかによって決定されると言っても過言ではない。

勝利至上主義型クラブの代表例であるレアル・マドリードは、資金が豊富なため、スクールなどの育成事業による資金集めが必要無く、必要最低限のカテゴリーしか設置していない。その分、その資金力をリクルーティングに集中させ、スペイン国内のみならず世界中（ヨーロッパ諸国、アフリカ諸国、中国）から若い選手を集めてきている。このように、より良い選手を発掘してくることに對して人員やコストを割いており、発掘した選手をより良い選手に育てようというのが基本的な理念である。また、多い時には1年に4～5人の選手の入替え（退団と新規獲得）があったということからも、育成を非常に小規模かつ短期的な視点で捉えていることが分かる。

一方、育成型クラブの代表例であるエストゥディアンテスでは、クラブ資金の多くを育成事業で賄っており、スクールやカテゴリーといった受け皿を数多く設けることで、出来るだけ多くのニーズに対応し、所属選手を確保している。そのようにして集めた選手達に

対し、各年代及びカテゴリーにおいて緻密な指導を施すことで、将来的にトップチームに入るような選手を一人でも多く育てていこうというのが基本的な理念である。ハイパフォーマンス部門に属する男女約180名がその予備軍であり、多くの選手にトップチームへ登り詰めるための時間と場が提供されていることから、育成を大規模かつ長期的な視点で捉えていることが分かる。

このように、勝利至上主義型クラブと育成型クラブの間には、育成理念において若干の相違点が存在する。ただし、共通している点もある。それは、各年代及びカテゴリー毎の段階で、選手を完成形に至らせようとはしていないことである。つまりは、発育発達の観点から、それぞれの年代やカテゴリーにおいて習得すべき技術や戦術が整理され、それに則って段階的に指導していくことで、育成カテゴリーが終了する頃（18歳前後）に選手としての完成形に至るようプログラムされているのである。

スペイン国内においては、勝利至上主義型クラブはレアル・マドリードとFCバルセロナのみであり、この2チーム以外は全て育成型クラブに属すると言っても過言ではない。こうした中で、選手育成にかけられる時間や規模、選手発掘の手段に関する理念は二極化されているものの、各年代及びカテゴリーで取り組むべき技術や戦術などといった、育成年代における期分け、いわゆるピリオダイズの理念はおおよそ共通している。このような共通理念が全クラブに浸透していることによって、選手は心身に過度なストレスを感じることなくバスケットボールに取り組むことができ、それがスペイン全体における選手育成成功の大きな要因となっているといえるだろう。

それでは、日本国内に目を向けるとどうだろうか。

2016年、男子バスケットボール界では統一プロリーグとしてBリーグが開幕するとともに、各チームにおけるU15ユースチームの設置義務化など、選手育成のための環境整備が促進されている（2018年1月時点）。しかしながら、リーグはもちろん、各チームの運営体制や事業規模はまだまだ発展途上であり、何を置いても、まずトップチームを強化することに対して資金や人材を割かざるを得ない状況にあることは否定できず、育成面への着手については、多くのチームにとって最優先事項とはなっていないのが実情である。

上記のようなこともあり、国内トップリーグが成熟しきれていない日本国内においては、スペインのレアル・マドリードなどのようにブランド力と豊富な資金力を武器に将来有望な育成選手を買い集める、といった勝利至上主義型クラブは簡単には生まれにくいと考えられる。そして、各クラブが地域密着型の育成型クラブとして、その質をどれだけ高められるかという点を課題とし、競争していく形になることが予想される。

しかしながら、現段階の日本国内において、育成システムやプログラムに関する知識を

十分に備えたクラブチームが多くあるとは言い難い。というのも、各クラブにおいて、スクールやユースチームを立ち上げ、選手育成事業への着手を謳ってはいるものの、どのような理念やシステム、プログラムをもとにそれを進めていくのかといった具体的な施策が明確に打ち出されていないためである。このような状況は、先述したフエンダブラダにおける旧体制時の状態と重なる。ユースチームが存在していても、指導方針が統一されず、各カテゴリで取り組むべき内容も整理されないまま、各コーチの裁量に任せるだけでは、育成型クラブの取り組みとしては不十分なのである。つまり、日本のクラブチームにおいても、現状から進展していかないチームは、育成が思うように進まず、育成組織自体がクラブ内での居場所を失い、育成の規模を縮小せざるを得ないなどの事態が生じることさえ考えられる。その結果として、その地域における将来性ある選手の成長にも貢献できず、そのクラブ全体の価値を損ねる可能性すら出てくるのである。

また、スペインにおいて、育成のピリオダイズといった共通理念があるように、日本では全クラブに共通化された具体的な理念が見当たらないのも現状である。

スペインでは選手の発育発達に合わせて育成していくことが共通の理念として構築されており、そのことにより、選手達はそれぞれのペースで無理なく育ち、優れた技術・戦術を身につけた一人前の選手へと少しずつ到達していく。そのタイミングやレベルにおける個人差はあるものの、それはあくまでもその選手個人の個性として認識される。

日本の場合、Bリーグはユースチームの設置目的として「世界に通用する選手を輩出する」(JAPAN PROFESSIONAL BASKETBALL LEAGUE, 2017)ということ掲げている。しかしながら、その目的を実現するために、どういうことに則って選手を育成していくのか、そうした共通の理念が不足している。そのため、「世界に通用する選手を輩出する」ことに向かって、それぞれのチームや現場のコーチの理念に依存して育成が進められていくことになりかねない。

例えば、選手個人の成長よりも、出来るだけ良いチームを作り、一つでも多くの試合に勝たせてあげようという発想に至り、その時期に必要な無い技術や戦術に取り組んでしまうという現象の発生も考えられる。このことは、各年代において、負けたら終わりのトーナメント形式の大会が主流である現状や、試合に勝つための戦術としてゾーンディフェンスを用いるなど、長らくミニバスケットボールの年代にまで勝利至上主義が蔓延し、国際バスケットボール連盟から制裁を受けた過去からも容易に想像できる現象である。翻せば、勝利至上主義がこれまでの共通理念だったとも言える。「世界に通用する選手を輩出する」という大目的掲げるだけでは、上述のような歴史を繰り返すことにもなりかねない。

このようなことから、まずは、育成における新たな共通理念を確立することが、日本の

バスケットボール競技における育成面での第一の課題となると考えられる。

それでは、日本のクラブチームが育成型クラブとして、どのような育成システムを打ち出していけば良いのか。その点について次の項目で考察してみたい。

②プレイヤーズ・ファーストな育成システム

スペイン国内の各クラブで共通していることは、年齢別にクラスやチームが組まれている点にある。日本のように、例えば、中学生、高校生という括りの中で1～3年生までをまとめて1チームとするようなカテゴライズ方法ではなく、各学年別でカテゴライズされていると考えると分かりやすいだろう。これは、先述したように、発育発達の観点から、取り組むべき内容は年代毎に異なると考えられているためであり、また、段階的にバスケットボールをトレーニングしていき、最終的（U 18以降）に完成形に至れば良いという理念が根底にあるためでもある。

なお、この点については、ハンドボール競技における強豪国と日本の一貫指導プログラムを比較研究したものからも看取することができ、その研究において、ヨーロッパハンドボール連盟（EHF）では、「ヨーロッパ各国の一貫指導に対する基本的な考え方や年代の分け方を公開し、若い年代の指導は身体的・心理的発達段階に応じて作成すること」とした RINCK 条約が締結され、ヨーロッパの強豪国では共通して「2歳ごとの年齢カテゴリー」（永野ら、2017）が用意されているとしている。

また、日本国内におけるバスケットボールとサッカーにおける一貫指導システムの比較をした研究の中では、「サッカーでは6歳から18歳まで2年ごとの細かな指導指針が出されている。またもう一つの特徴として各年代カテゴリー別の発育発達における特徴を踏まえた指導が提示されて」おり、「バスケットボールの一貫指導システムではサッカーのような発育発達の特徴を捉えたカリキュラムが不足しているということが窺えた。各年代における身体的特徴及び心理的特徴を記述し、それに対応した指導内容、指導方法を記述する必要があると考えられる」（蔵元・鈴木、2013）とも述べられている。

このことから、日本のバスケットボール界においては、選手及び子ども達の発育発達を考慮した育成システムとプログラム構築の必要性が高いと言える。そうした課題を解決するためにも、本調査を通して明らかになった、スペインの育成型クラブにおける育成システムを大いに参考にすべきなのである。

また、人数の違いも大きな特徴である。今回インタビューした各クラブのように、スペインのクラブチームでは各年代において、最大でも1チーム12名ほどでチームが構成されている。このような人数であれば、練習中の選手の待機時間を最小限に抑えることがで

き、運動実施回数を十分に確保することが出来る。加えて、コーチの指導も行き届きやすく、練習中において、コーチから選手へのフィードバックやフィードフォワードが施されやすいため、選手達の学習はより深まりやすいと言える。これは、日本の部活動のように、1～3年生が一堂に会し、数十人の選手を一人の指導者が指導するといった練習形式では実現し難いことである。

加えて、試合においても、1チーム12名ほどであれば、各ポジション2～3名程度のため各選手の出場時間が確保されやすく、より実戦での経験を積みやすいという利点もある。このことは、コーチ側にも、満遍なく選手を起用しやすいという利点を生んでいる。こうした仕組みは、日本の多くの部活動現場に見られるような、控えベンチに座りきれない程の選手がいて、チームのほとんどの選手が試合に出場すること無く、応援のみで1シーズンが終わる、といった現象が発生しないように考えられた結果、生まれたものでもある。

このように、スペインの育成システムは、選手が競技者として成長しやすい環境にあり、まさにプレイヤーズ・ファーストな構造になっていると言える。そして、学校部活動では実現が難しく、クラブチームだからこそ実現しうるものと言っても過言ではない。

③ミニのカテゴリーへの3ポイントルールの設置

エストゥディアンテスのボラス氏へのインタビューの中で、ミニのカテゴリーに対し3ポイントルールが設置されていることに短く触れた。筆者としては非常に興味深い内容であった。また、これは過去にカタルーニャ地区を視察に訪れた際にも大変興味深く感じた点であった。

日本のバスケットボールにおいては、特にミニの年代は、選手達が身体的に未成熟な子どもということもあってか、3ポイントルールを設置しておらず、換言すれば、中学生以降での一般的なルールとは異なるルールが施行されているということである。

しかしながら、スペインでは異なる見解のもとで、3ポイントルールを設置していることが推察される。それは、選手が身体的に未成熟だからと言って、一般的なルールの中に存在するものを削減してしまうのでは無く、身体的に未熟なことを考慮して、ルールをダウンサイズ化、いわば縮小しているというのが私見である。

コート の広さやボールのサイズを小さくしていることや、ゴールの高さを低くしていること、試合時間を短くしていることなどがその具体例であり、これはスペインだけでなく、日本でも行われていることである。しかしながら、スペインでは、上記の例と同じように、3ポイントルールについても、3ポイントラインを一般のルールよりも、よりゴールに近い位置に設置するという工夫によって、一般のルールと同様の内容を維持しているのであ

る。

つまり、ルール自体を削除することなく、枠組みを縮小することで、ミニのカテゴリーと中学生以降のカテゴリーの競技特性の共通性を維持しつつ、各カテゴリーの身体的特徴に合わせたゲーム形式を実現しているのである。

なお、バスケットボールにおいては、「通常のショットでは得点が2点入るのに対して、スリーポイントショットでは得点が3点入るため、試合に勝つためにはスリーポイントショットの成功率を高めることが重要であると考えられている」（田邊ほか，2017）と言われている。このことは、3ポイントルールの存在が選手の技術的側面に影響を及ぼしているとともに、チーム戦術や試合の勝敗を左右する重要な要因となっているとも換言できる。これは、上記の研究以外にも3ポイントシュートに関する研究が多くなされていることから明らかである。（三浦ほか，2001；三浦ほか，2004）

そのため、ミニのカテゴリーにおける3ポイントルールの有無は、ミニのカテゴリーでの選手育成に対する影響はもちろん、中学生以降の選手達の技術的、戦術的側面にも少なからず影響を及ぼしていると考えられることは何ら不自然では無い。また、それはすなわち、各年代における各チーム、ひいては日本代表チームの戦術や勝敗にすら影響を及ぼしているとすら考えられるのである。

こうしたミニの段階における差異がその後のパフォーマンスに与える影響については、今回の視察では明らかにできなかった点ではあるが、今後の自身の研究調査の中で課題として追究し続けたい項目である。

【まとめ】

スペイン国内においては、勝利至上主義型クラブはレアル・マドリードとFCバルセロナのみであり、この2チーム以外は全て育成型クラブに属すると言っても過言ではない。こうした中で、選手育成にかかる時間や規模、選手発掘の手段に関する理念は二極化されているものの、各年代及びカテゴリーで取り組むべき技術や戦術などといった、育成年代における期分け、いわゆるピリオダイズの理念はおおよそ共通している。このような共通理念が全クラブに浸透していることが、スペイン全体における選手育成成功の大きな要因となっているといえる。一方、日本では、Bリーグがクラブライセンスの中にユースチーム保有を義務付けたものの、全クラブに共通化された具体的な理念が見当たらないのが現状であり、各クラブ単位で独自の理念のもとに進められていくことが予想される。まずは、育成における新たな共通理念を確立することが、日本のバスケットボール競技における男子選手育成の第一の課題となると考えられる。

また、スペインの育成システムは、年齢毎に細かくカテゴライズされていることや、1チームの人数が12人程度の最小限に抑えられていることなどによって、選手達自身が得られる、運動からの学習経験の回数を多く確保できていると同時に、コーチからの客観的なフィードバックも受けやすいものになっている。これらのことは、選手がより多くの運動経験を積む中で、成功体験や失敗体験を通し、反復や修正を繰り返しながら成長していける環境であると言え、まさにプレイヤーズ・ファーストな構造になっていると言えることから、日本のバスケットボール競技における男子選手育成においては、本調査を通して明らかになったスペインの育成型クラブにおける育成システムを大いに参考にすべきである。

加えて、競技ルールの面において、ミニのカテゴリーにおける3ポイントルールの有無は、スペインと日本の育成現場での大きな違いの一つであり、このことが選手達の成長に何らかの影響を与えていることが推察される。この、ミニのカテゴリーにおける3ポイントルールの設置が与える影響については、今後の自身の研究調査において、課題として追究し続けたいと考えている。

【参考文献】

- 1) JAPAN PROFESSIONAL BASKETBALL LEAGUE (2017) U15,U18 チームの設置について, 2017
- 2) 倉石平 (2014) スペイン事情 その2, 日本バスケットボール協会, p81-88
- 3) 蔵元彩・鈴木淳 (2013) バスケットボールにおける一貫指導システムの現状と課題 - サッカーの一貫指導システムとの検討, 福岡教育大学紀要, 62-5, p116
- 4) 町田洋介・吉田健児郎・守屋志保 (2014) 平成 25 年度スペイン研修報告 その1, 日本バスケットボール協会
- 5) 三浦 健・三浦修史・松岡俊恵 (2001) バスケットボールにおけるジャンプシュートの動作分析 - 2 ポイントシュートと 3 ポイントシュートの比較 -, 鹿屋体育大学学術研究紀要, 25 : 1-8.
- 6) 三浦 健・図子浩二・鈴木章介・清水信行 (2004) バスケットボールにおける長距離シューターの動作分析 - 上肢の動作について -, 鹿屋体育大学学術研究紀要, 32 : 11-18.
- 7) 永野翔大・ネメシュ ローランド・藤本元・會田宏 (2017) ハンドボール競技における強豪国と日本の一貫指導プログラムに関する比較研究, コーチング学研究, 30-2, pp109 ~ 123

- 8) 日本バスケットボール協会 (2014) バスケットボール指導教本, 上巻: p190, 大修館書店
- 9) 日本バスケットボール協会 (2016) JAPAN BASKETBALL STANDARD, p.1 ~ 52
- 10) 田邊智・瀬戸孝幸・川端浩一・村上雅俊 (2017) バスケットボールのスリーポイントシュート時における熟練者と未熟練者の関節運動の違いについて, 体育学研究, p1